

# 「ホームレス問題の授業づくり」から見えるもの



「ホームレス問題の授業づくり全国ネットワーク」  
共同代表 生田 武志さん

ホームレス者を青少年が襲撃するという事件が後を絶たない。殺人にまで至るケースもある。そのような状況を何とか越えたいと、学校現場に働きかけ、ホームレス問題を子どもたちと一緒に考えようという動きがある。「ホームレス問題の授業づくり全国ネットワーク」だ。生田武志さん（野宿者ネットワーク代表）、北村年子さん（フリージャーナリスト）ら4人が呼びかけ人となって、2005年4月に立ち上げた。

共同代表の1人生田さんは学生時代から大阪釜ヶ崎の日雇労働者・野宿者支援活動に関わり、以来20数年間を住人としてホームレス支援にあたってきた。そこから浮かび上がってくるものは何か、生田さんに聞いた。

## ホームレス問題を考える 8

### 1 986年、生田さんは

学生時代、たまたまテレビで釜ヶ崎の取材番組を見た。下宿先からわずか1時間半のところにもそのように過酷な世界があるということに衝撃を受けた。当時、自分と社会との接点が見つけれないという「現実喪失感」に苦しんでいた。引かれるように釜ヶ崎を訪ねた。ドヤ街が建ち並ぶ独特の環境は社会一般の価値観から切り離され、どこか自由でやさしさがあつた。みんな身体を張って一生懸命生きていた。当時はまだ仕事もそれなりにあつた。

そんな風景が一変するのは90年代に入って以降だ。仕事が激減し一挙にホームレスになつた人が溢れた。肉体労働が難しくなつた高齢者や病気を抱えた人が真つ先にホームレス化したのだ。その頃から、青少年によるホームレス襲撃事件も頻発しはじめた。襲う少年たちはごく普通の子どもたち。だが共通していることがあつた。ホームレス者を襲

い、時には死に至らしめているのに、少年たちには驚くほどの罪の意識がなかつた。

### 差別という暴力

青少年によるホームレス者襲撃に対して、生田さんは次のように考える。

誰かを襲撃するという行為そのものは、社会に普遍的にみられ、決してめずらしいものではない。つまり、人間とは、自分と同類とみなした人間を殺すことには強烈に抵抗感を感じる一方で、ある人間が自分の属する共同体の外にいて、しかもその人間に対して自分の共同体が優位にあると判断した時は、骨もみんなぐじぐじや「なるようになる」に持つていける可能性がある。常に持つていけるように見える。仮にそう考えれば、少年たちの襲撃は、私たちの社会にとつて別に「胸に覚えのない」ものではない。ただ単に少年たちは、社会的弱者であるホームレス者を、自分たちの共同体の「外にいる人間」と明

確に意識しているだけである。私たちの社会は、子どもに「ホームレス者」に話しかけられないと無視しなさい」「勉強しなさい」と教えている。そして「迷惑だ」と言つては、行くあてのない野宿者を商店街や公園から追い出している。おそろしく少年たちは、幼い時からこうした大人社会の対応を見て、野宿者を外部の人間として「学習」しただけなのだ。これでは、少年たちにとつてホームレス者はいかなる意味でも人間的な「共感」の対象ではありえない。

ホームレス者の多くはダンボールや空き缶を集めたりしてひっそり暮らしている。「彼らの本当の姿を知つてほしい。この暴力的な社会構造を告発したい」「ならば」と、学校に向いて高校生・中学生を対象にはじめたのが「授業だ」。

授業は2001年からはじめた。2005年には「ホームレス問題の授業づくり全国ネットワーク」も立ち上げた。授業の要請回数も増えている。今では全国各地の小中高校でホームレス問題や貧困に関する授業を行う。

### 授業、そして「アイス取りゲーム」が教えるもの

生田さんは授業の前に生徒に対して、アンケートをとることがある。ホームレス者に対して彼らがどんな意識を持つているかを知るためだ。地域差あるいは階層差でその意識は異なる。ある進学エリ

ト校では、ホームレス者に対して「社会的地位の向上をめざさなかつたので、尊敬に値しない」「人間ではない」「世界が違う」などの感想が出た。そこまで極端ではないにしても、「怠けていたからホームレスになつたのではないか」「ホームレスになつたのは本人の努力が足りなかつたからで、それは自己責任だ」という大人の見方に同調する生徒は多い。それにゲストとして授業に参加してもらつたホームレス者自ら「こうなつたのは自業自得です」と言うことさえある。彼らは「もつと我慢して仕事をしていたら」「借金しなかつたら」とひたすら自分を責めるのだ。

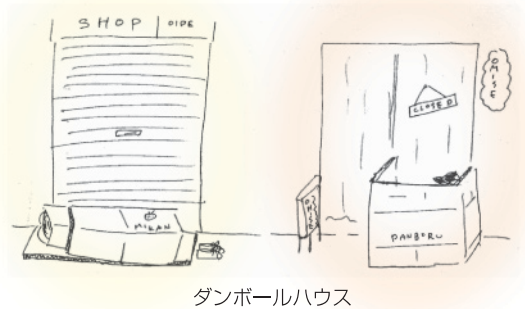
しかし、80年代までは同じ状況でもホームレスになる人はほとんどいなかった。パブルがはじけ一挙に失業者が増え、それがそのままホームレスの増加につながつた。つまり、社会構造が変わつたといふことが最大の要因だ。すべて個人が悪いわけではなく、また社会のせいだけでもない。その見極めが大切なのだ。そのことを理解してもらつたために「アイス取りゲーム」の例えを小道具に使う。3つのアイスに対して5人がアイスを争うというものだ。アイスを仕事とみなすと絶対数が不足しているから、必ず2人は失業するということになる。これは「本人の努力」だけでは片付かない。社会構造の問題なのだといふことを分かつてもらう。確かに仕事さえあれば少なくともホームレス問題の多

くは解決する。授業の成果一出会いがもたらすもの

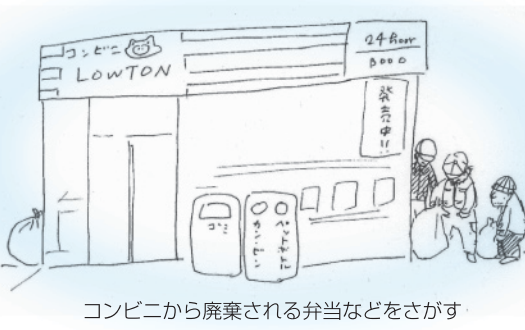
授業をするとき初めは無関心だった生徒のうち、クラスに1〜2人は強い関心を示し、その後「夜回り」などに参加しさえする。生徒の一人が釜ヶ崎で研修を終えて書いた感想文が、「私はホームレス問題にぶつかつて、社会というものを肌で感じた気がする。自分と社会の結びつきを、この問題は教えてくれる気がする……」。

また、別の生徒は「ぼくは釜ヶ崎が好きで、そこに住んでいるおつちちゃんたちも好きだ。釜ヶ崎の人たちで厳しい生活を強いられる人はきつとやさしすぎるんだと思ひました。やさしすぎてアイス取りゲームのアイスを譲つてしまふのではないかと思ひました」という感想を書いてくれた。アイスを取ることだけが勝者となるという今のゲームのルールとは別のルールが生まれるかもしれないという予感がする。実はこの生徒は授業前のアンケートでホームレス者に対して「人間ではない」などと書いた進学エリート校の生徒だった。

ホームレス問題と出会い、実際にホームレス者と出会うことによつて、生徒たちは「社会」と「自分」を問い直しはじめる。生田さんはそれを「希望」と言う。



ダンボールハウス



コンビニから廃棄される弁当などをさがす



ホームレス者が使いにくいように仕切りが付けられた公園のベンチ